

國會、蜻島八間跡能國者

〔萬葉集略解一〕上 天のかぐ山は古事記の歌に、比佐加多能阿米能迦具夜麻とあれば、あめのかぐやまとよむべし。

〔萬葉集一〕雜歌 天皇御製歌

春過而夏來良之、白妙能衣乾有天之香來山。

〔萬葉集一〕雜歌 中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首

高山波雲根火雄男志等、耳梨與相諍競伎神代從、如此爾有良之古昔母然爾有許曾虛蟬毛、嬾乎相格良思吉。

反歌

高山與耳梨山與相之時立見爾來之、伊奈美國波良。

〔播磨風土記 揖保郡〕出雲國阿菩大神、聞大倭國畝火香山耳梨。三山相鬪、以此欲諫止上來之時、到於此處、乃聞鬪止、覆其所乘之船而坐之、故號神阜阜形似覆。

〔萬葉集抄〕三山者、畝火香山耳梨山也、見風土記。○中 其由緣は、むかしは山川も夫婦の契をむ

すびけり、かゝるに、かぐやまは女山也、畝火山と耳梨山とは男山なり、しかるにみ、なしやま、はじめにかぐやまを、けしやうするに、なにとなくうけひくけしきなりけり、そののちに、うねびのやま又かぐ山を、けしやうするに、うねびの山はすがたもお、しくよかりければ、これに心うりつにけり、を、しといふは、けだかくよきなり、さてみ、なしやま、さきのやくそくにまかせて、あはんとするに、かぐやまうけひかず、うねびの山これを聞て、ともにた、かふ、これをみつ山のた、かひと云也、いまこのみうたに、彼本縁をよませ給として、神代よりかゝるにあらし、いにしへも、しかにありこそ、うつせみもつまを、あひうつらしきとは、令詠給也。